

森本 茂著

「源氏物語の風土」

岡本 彦 一

「京都もの」とでもいうべき図書の出版ブームがあつた。まだ、この種の本はぞくぞくと出版されているが、やつぱり「あつた」といふべきではなからうか。この京都ものブームは見る本の流行と関係が深いように思う。この点を少しだけつてみよう。

見る本をさうまく廉価に生かしたのは「岩波写真文庫」ではなかつたか。つまり見る本としての京都もののはしりは「岩波写真文庫」の「京都―歴史的に見た―」(26年刊)であろう。この文庫はついで、「桂離宮と修学院」(26年刊)、「京都御所と二条城」(27年刊)をへて「京都案内」(29年刊)に至る。つづいて「角川写真文

庫」が「京都めぐり」(30年刊)を出した。すべてB6判である。

京都新聞に連載されたものが本になつて、「河出新書」の「京都の仏像」(31年刊)、「東山三十六峰」(32年刊)となる。叢書名の示すとおり新書判である。後者は見る本とはちといいにくいだが、似たものに夕刊京都の「京味百選」(35年刊年)もある。

朝日新聞連載が本になつたのは「カメラ京ある記」(34年刊)、A5判しつかりした本で、本格的な見る本、この手の本のはしりである。以後続々と出た。奈良本辰也「京都の庭」(35年刊)、「跡 続カメラ京ある記」(36年刊)、京都新聞連載

の「古都再見」(36年刊)、中村直勝「京の魅力」(36年刊)、芳賀幸四郎他「京の禅寺」(37年刊)、清水一、柴田実「京の民家」(37年刊)、矢内原伊作他「京都の庭」(37年刊)等々というぐあいである。

型が小さく、文庫判にかわつた。「現代教養文庫」の重森完途「京都の名庭」(35年刊)、白井喜之介「カメラと詩歌 京都」(36年刊)、「カラーブックス」の出雲路敬和「京都」(37年刊)、日本経済新聞の「カメラ京都の顔」(37年刊)などがそれである。

しかし、何といつても見る本での圧巻は、京都市編「京都」(36年刊) A4判、と福田勝治「京都」(33年刊) B4変型判とであろう。別格である。また竹村俊則「新撰京都名所図会」七卷(33―40年刊)は足で書いた力作としてその挿画ととも

に最もたよりになる本であろう。以上は見るとしての京都ものを、その出あしのぐあいを見はからつて挙げてみた。ここに書評にとりあげた「源氏物語の風土」も、これらの本の流れに位置

さるべきものと思われる。形態の上では文庫判系列に属するものといえる。写真半分、文章半分で京都みてあるきというところ。だが、内容的にはいささかちがつた系列に属するのであつて、その先蹤を求めると「岩波新書」の林屋辰三郎「京都」となる。この著は、古い京都の歴史を現在の京都の地域のなかにさぐりあてようとする、めずらしい意図をもつた著述であつた。森本氏の「源氏物語の風土」も源氏物語というフィクションを根本においたとしても、千年の昔を現在に求めようとした点、厳密な学術的考証を背後に蔵している点、この系列に属する著作と見てよからう。朝日新聞の紹介子をして、「本書は綿密に文献を追いながら、……詳細にしらべてゆく。うっかり文学散歩だけを楽しんでいられる本ではない。」といわしめたところのものは、ここにあるのだ。

さて、本を見てゆこう。美しいカバーのかかつた表紙を開くとタイトル・ペー

「源氏物語の風土」

ジが二枚ある。珍らしい。文章となつて、玉上琢弥氏の「文学環境としての平安京」という一文が「序にかえて」として掲載され、まことにふさわしい導入になつてゐる。次に「源氏物語について」となり、作者・成立から五十四帖のあらすじを説く。源氏の梗概を17ページに要約することは何としても無理なこと、それをとにかくやつてのけているが、ある高校生に読ませたら、やたらに名前ばかりが出てくるといつた。書く方、読む方お互にかたのないことであろうが、おもしろ切つてもつとながくし、うんと遠近法をつけるといふやり方もあつたかも知れぬ。

いよいよ「風土」に入つて、鳥辺野の里、清水寺の観音、嵯峨野の住居、野宮の春、大原野への道、宇治の自然、宇治十帖の世界、須磨明石の浦、大宰府の秋、初瀬の川波と十項にわたつての叙述となる。

最初の項が鳥辺野であることは縁起でもないが、考えようによつてはこれも自然のなりゆきであろう。というのは源氏物語というのは、よく人の死ぬ物語であり、また人の死が印象的な物語である。始めの方だけでも、まず桐壺では桐壺更衣、更衣の母、夕顔では夕顔、若紫では尼上、葵では葵上、賢木では桐壺院。なかでも夕顔や葵上の死はただごとではないのだから、ほんとうにうす気味のわるい物語である。著者は愛宕、珍皇寺、鳥辺野など葬送に關係のあるところ、あるいは平安時代の葬礼のしきたりについて、「栄花物語」、「以呂波字類抄」、「河海抄」、「文徳実録」、「延喜式」、「拾遺抄註」、「性靈集」、「山城名跡巡行志」等々、わたしなどは名前だけは聞いているが、読んだこともない古書を博引傍証、縦横に扱つて説を立てている。さて次に著者はよくあるいている。京都に住んでいれば、夏の六道さん参り、あるいは五条坂の陶器市にすずみがてら（実は暑くて閉口なのだが）出かけることもあろう、第二節に扱つてある清水さんなどは行つたことのない人はないだろう。だが、著者のあるき方は、ただどこにも、かしこにも行つた

というだけではないのであつて、そこで何をどう見たかである。ここには飛躍的な想像力と確実な推理力とが在る。著者は源氏物語というフィクションの舞台になる場所を、作者紫式部がその土地からつかんで物語を構想したのである。そのつかみ方で、つかもうとしているのだ。著者は「あとがき」でいう、「源氏物語は架空の物語であるから、遺跡があるはずはない。本書においてわたくしは、そんな架空の遺跡について述べようとしたのではない。わたくしは、源氏物語の作者や読者（聞き手）の立場に立つて、源氏物語に描かれた世界の背景を、自然的・精神的な面から研究してみても、源氏物語が平安時代に読まれた（聞かれた）ような形において、感動的に源氏物語を理解・鑑賞したいと思つたのである。」と。紫式部の目で見ることさえ困難であるのに、さらに千年を隔てた現時点の地域から構築しようとするのだからなみなみではない。まずはできない相談である。しかし、この本を読んでいると、著者の考えにま

るめられてしまうから不思議だ。それだけの説得力をもつているのは前記博引傍証とすぐれた眼力の故であらう。音羽の滝の水源推理一つにしても著者は見るべきものを見ている、そういう気がするのだ。最後の初瀬の項でも、著者はいいた放題のことをいつているようなのだが、やはり著者のいうとおりに思わなければならぬようになってくる。

著者のもつこういう不思議な説得力は、また文章と写真にもあるように思う。

本書の文章はきちつと格にはまつた文章である。これは著者の性格から来たのかも知れない。ここでは何をどういい、こちらではこれをこいうと、びたりびたりと押えてゆくそつのない表現である。こういう文章はとかく形式や格のわずらわしさを感ぜざるものなのだが、そういうわずらわしさをないところ、まことに微妙である。調子の高い文章の一例として「野宮神社」のくだりを挙げておこう。読み進むうちに、自分もいつしか嵯峨野に分け入つているし、また著者が行文の

間ににこやかに現われてきたりする。自然の描写、人物の点出、俳句の引用、過去の記憶の叙述とかみ合わせるあたり構成にすぎない。

この本は見る本でもある。本の半分は写真である。だから写真がよくなくて話にならない。この手の本は文章の筆者と写真の撮影者とが別々であるのが普通のようにだ。だがこの本の写真は、少し臼井氏のものもまじつているそうだが、ほぼすべて著者の撮つたものであるようだ。「あとがき」に「素人なりに写真は、源氏物語の世界がしのばれるように着意したつもりであり、本書では『文は写真の一部であり、また写真は文の一部である』と少くともそうありたいと願つたものばかりである。」と自信のほどを述べている。話に聞けば、少しガタの来た、古いカメラを駆使したものである。ここにも著者の目のよさがあるようだ。もちろん、正面きつた平凡なもの、なかにはなくもがなのものもないではない。しかし、こういう本では、きちんと撮つた

ものもまた必要であろう。ともあれ、これらの写真が説得力の一半を荷つてゐるわけだ。「宇治川の流れ」、「山の辺の道」などいい写真だ。ことに後者は著者も自信があるらしく、撮影した一瞬を支にしている。「老杉の下を行くと、折からの冬の木もれ日が数本の太い光の線となつて地に落ちていた。幽邃な一瞬……思わずカメラのシャッターを切つた。」と。

以上、この本の説得力の根元を探つてみたのだが、なお本書については、その主題のあり方や「風土」と文学の問題などについて、ふれたいところがある。しかし、いまはそこまでのばしてゆく余裕もないので、卒読の間気づいたミスプリント等を少々記して終りたい。特に気をつけて読んだわけではないから何ともいえないが、ミスプリントの少い本だと思ふ。ちよつと気のついたところを挙げておく。p. 70の「噴泉」は「噴泉」、p. 227の「手宝塔」は「多宝塔」のミスプリント。p. 197の「関子纂」は「関子纂」の誤り。p. 22「雨夜」は「雨夜」、「致仕」

「源氏物語の風土」

は「致仕」であろう。p. 128「左岸」は「川の下流に向かつて左の岸」（広幹苑）ということになると「右岸」であろう。

p. 129「秋の野の」の歌の左註のところ、「誰がどういふ時に詠んだものか明らかでない。」の前後に何かつなぎことばかあるいは補足のことばがないと理解しにくいのではなからうか。

鈴木弘道著「寝覚物語の基礎的研究」と本書との出版記念会の席上、国崎望久太郎氏は文芸についてどのように奉仕するかということ、すなわち向上に努力するか、それとも普及に努力するか、という毛沢東のことばを引いて、鈴木氏の著を前者に、本書を後者にあてて話をされたが、日本文学研究という側から本書を見ると、まさに普及への努力の結晶といえるであろう。

白川書院 昭和四十年五月 文庫判 二五
六頁 三五〇円